

扇海丸

《主要目》貨物船、扇海汽船所有、1,262総トン、1,946重量トン、垂線間長69.5m、幅10.1m、主機三連成汽機1基、出力483図示馬力、最高速力9.7ノット、1917年播磨造船所建造、同型船扇洋丸

関東大震災の救援第1船として 大阪を出航



関東大震災で各船が活躍

トルコ地震、台湾大地震と、多くの死者を出す震災が相次いだ。あの阪神大震災が発生してから今年で五年目。「災害は忘れたころやってくる」といったのは寺田寅彦だった。が、情報が世界を駆けめぐる今では、大惨事は忘れるいとまもなく起きている。

この「名船発掘」では目下、鉄道連絡船を主体に紹介しているが、今回は予定を変更し、災害にゆかりのある船をとりあげたい。関東大震災のとき、救援第一船として大阪を出航した「扇海丸」（せんかいまる）、このいたって地味な貨物船が今回のテーマである。

さて、関東大震災が発生したのは、一九二三年（大正十二）年九月一日の午前十一時五十八分。その第一報が、横浜の新港埠頭に接岸していた東洋汽船の太平洋航路客船「これや丸」から発信されたことは、よく知られている。同船の通信長川村豊作が第一報を銚子無線電信局に打電したのは、地震発生から十分後の午後〇時八分であった。

横浜市内は大火災になった。入港中の各船が多くの避難民の救出にあたったことは、いうまでもない。神奈川県知事は「これや丸」に救助された。「これや丸」には、警察部、税関など諸官庁の仮事務所が置かれ、知事は同

船の通信室から救援要請を打電した。

救援第一船が大阪を出航

要請を受けた関西の対応はすばやかった。即日、大阪府で対策会議がもたれ、翌日から救助品の海上輸送計画が具体化した。

救援第一船となったのは、大阪商船のチャーター船で、東京→三角（九州）間の定期航路に就航していた千二百総トンの貨物船「扇海丸」である。東京→三角航路は、大震災の一カ月まえに開業したばかりだった。寄港地は、横浜、大阪（臨時）、門司、長崎。おそらく、復航便を救援船にあてたのだろう。

「扇海丸」は、地震翌日の九月二日に救助品を積み終え、午前十一時に大阪を出航、横浜と東京に向かった。医療班と警察部員などのほか、大阪府助役も乗船。米三千石、沢庵三百樽、梅干百樽、飲料水などを満載していた。『大阪朝日新聞』はこの日、第一船「扇海丸」の出航を報じる号外を出している。

積みきれなかった物資は、第二船の「志かご丸」に積んだ。「志かご丸」は、大阪商船の南米東岸航路の定期貨客船で、同じ二日の午後二時に大阪を発航している。

この日は神戸からも、午後四時に支援船が出航した。救援第三船は、日本郵船の横浜→上海航路の定期貨客船「山城丸」である。

救援三船は、いずれも定期船である。震災直後はとりあえず、阪神から京浜に向かう定期便を救援活動に利用したのだ。

到着第一船がどの船だったかは、首都の報道機関が壊滅したため不明である。が、三船のスピードからみて、十六ノットの速力を有する「山城丸」だった可能性が高い。食糧品と飲料水を満載した同船は、翌三日横浜に到着。避難民三千人を収容していた日本郵船の欧州航路定期船「三島丸」に横付けして救助品を支給し、他船にもこれを分配した。

式典前に進水した「扇海丸」

「志かご丸」と「山城丸」は有名船だが、「扇海丸」とは一体どんな貨物船だろう。

この船は、鈴木商店の傘下で再発足した播磨造船所が建造した五番船である。

急造の仮設船台で造られたが、このころの播磨造船所は進水作業が不慣れだった。そのため進水式の日、来客がまだ別館で待機中に、船が海上に滑り下りてしまったというエピソードが、同造船所の社史に記されている。発注したのは扇海汽船。関東大震災のときのオーナーは西宮の平出商事で、前述のように東京→九州航路に就航していた。

昭和初期には、大阪と北朝鮮の日本海沿岸各港を結ぶ大阪商船の定期航路に張り付いて

いる。地味な貨物船だが、「扇海丸」の名は大阪商船の社史のあちこちに登場する。

のち、加能汽船に身売りして「加能丸」と改名。戦時中に東邦水産の手に渡った。そして敗戦の年の四月、室蘭を出航し日本海を下する途中、粟島沖で濃霧のため座礁沈没。これが、関東大震災の救援に従事した知られざる貨物船「扇海丸」の略歴である。

強力だった船による支援活動

五年前の阪神大震災のとき、次々と伝えられるいたましい報道のなかで、多くの商船などによる救援活動は、内外からのボランティアの活躍などとともに、多少なりとも救いがある話題ではなかったろうか。

機能をうしなつた陸上輸送機関の代替手段として、十本をこえる旅客航路が臨時に設けられ、何隻ものフェリーがこれに従事したことは記憶に新しい。だが、これらのフェリーの多くは、明石海峡大橋の竣工によって航路がなくなり、リタイアしてしまった。

関東大震災と阪神大震災の史実は、港湾都市が被災した場合、船による支援が強力であることを示している。地震列島日本で生きる者は、こうした史実を忘れてはなるまい。

山田 進生